

第十回 ワルシャワ大学日本祭
『戦争と平和 — 昭和天皇の日本 (1926-1989)』
2016年10月24～26日、ワルシャワ大学中央図書館

昭和時代の幕開けとなる裕仁皇太子(1901-1989)の践祚が行われて天皇となってから、本年で90年を迎える。近年日本では、宮内庁による『昭和天皇実録』の公開に伴い、その時代に関する活発な論議が展開されてきた。昭和天皇の在位期間は、歴代天皇の中でも最も長く、また激動の時代でもあった。民主化や近代化政策を推進していった日本は、経済危機に陥ったことから西洋との関係を断ち切り、やがて戦争を主導するようになり、戦後は再び民主化されて大きな発展を遂げ、世界で第3位の経済大国となった。昭和史は一般的に次の3つの時期に区分されている。1926年から1945年までの民主主義・ナショナリズム・戦争の時代。1945年から1952年までの占領期。そして1952年から1989年までの平和・民主化・高度経済成長の時代である。

長く続いたアジア・太平洋戦争は、日本とその地域における諸国との関係に今も暗い影を落としている。1946年にアメリカ占領下において公布された平和憲法の改正についての論議は、未だ激しく論じられている。米軍の長年に亘る駐留、そして領土争議、その中にロシアとの平和条約締結の妨げとなる北方領土問題が未解決のまま残るため、日本の「戦後」はなかなか終わらない。

同時に現在、昭和ノスタルジーが浮かび上がっている。それは戦前の大衆文化への郷愁なのか、それとも「神聖天皇」や「特別な」日本へのノスタルジーなのか。あるいは、皇太子が初めて民間出身の女性と結婚した出来事にも見られるように、どんな夢でも実現する時代、経済発展の「奇跡」の時代、国民生活が潤った時代への郷愁であろうか。

このシンポジウムでは、国際学会と国内学会に分け、昭和時代の歴史、文学、哲学、美術、舞台芸術、言語学といった幅広い意味での文化、そして政治、社会、経済の諸問題について、学際的な視点からの考察がなされる。

ワルシャワ大学日本学科

エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ教授、Prof. Ewa Pałasz-Rutkowska
カタジナ・スタレツカ博士、Katarzyna Starecka, Ph.D.